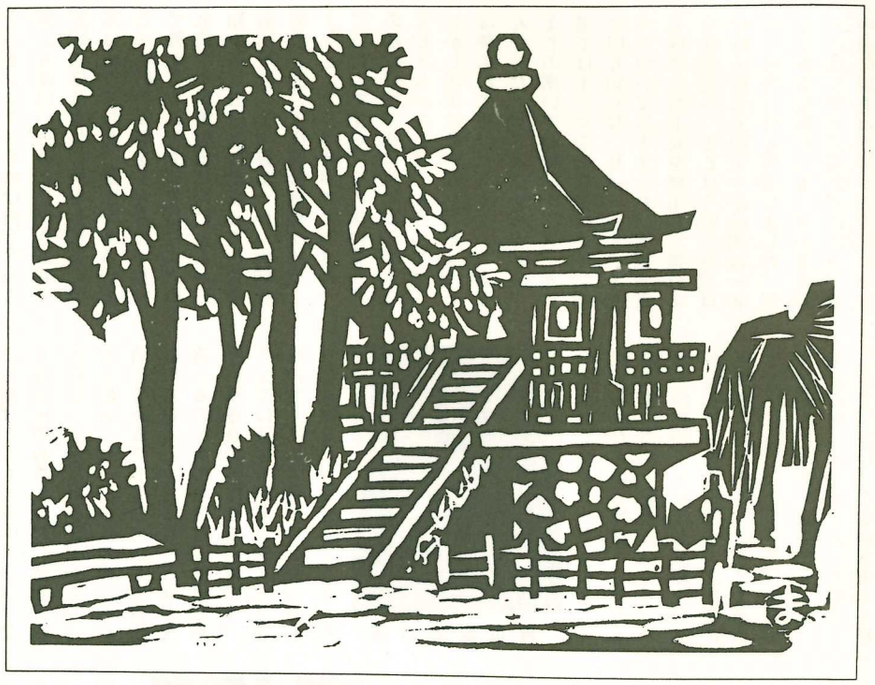
北九州市の文化財を守る会

会　報

No. 42　58. 3. 15

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区城内1－1
北九州市教育委員会文化課内
電話　582－2389
振替口座番号　福岡393

印刷　吉田印刷株式会社
北九州市若松区浜町一丁目19－1
電話　761－5424



高塔山河童封じの地蔵尊
片山正信氏の「版画若松百景」より

高塔山から

葦平参列のため高塔山に登った。ここは城跡で、元禄古図には高頭山古城とも記されている。山頂に火野葦平の「石と釘」により知られる、心豊かな夢誘う「河童封じの地蔵さん」がある。

高塔山は若松都心部にある標高約百二十米の丘陵で、四周の眺望がよい。晴れた日は山口の角島、関門橋、苅田の工場も望める。

山頂から望まれる北九州の古い時代の跡を眼で辿ってみよう。響灘に浮かぶ白島は、諸説あるも永禄年間に毛利元就公の御座船の難を脇田の水練の達人本田具波伊が救け、その功により白島を賜わった記録がある。白島沖から関門にかけては、享保年間に唐密貿易船を幕府指揮下、小倉、筑前、長門三領共同で打払った海面である。

白島の手前若松地先の岬には、市文化財「小田山古墳群公園」がある。眼下の市立病院一帯の小丘は、古地図による浜田古城の跡で又、文明十二年に宗祇法師が一夜を明かした寺のあった所で、「名や思うこよひしぐれぬ秋の月」の句を残している。この附近は修多羅の合戦場で、永正四年頃麻生近江守興春の二子与二郎、与三郎が京麻生の重囲下に見事敵将を討った記録がある。

正面区役所右手の善念寺には中ノ島城主若松代官三宅若狭家義の墓がある。区役所裏の森は若松恵比須神社で、若松の名称起源となる由緒を持つ古社で、若松浦の歴史を伝える遺物が多い。若戸大橋の若松側主柱右側が若戸渡船場で、黒田藩が洞海出入の人と物を監視した洲口番所跡である。附近に御船手が常駐し、舟子の住む船頭町があった。渡船航路の中央に水城跡の中ノ島があったが、航路拡張のために取除かれた。戸畑の街を隔てて足立山系を背に小倉の街が拡がり、慶応二年の小倉城炎上は遥かに望まれたことであろう。

眼下の若松駅右側の山手沿が黒田藩の米倉跡で、藩の廻米約三十万俵中約二十五万俵を若松から積出した。米倉跡右山手の石段を登りつめると若松港の繁栄を祈った金比羅神社があり、その裏手を登ると高野山九州別院の東南院に至る。その裏道を辿ると火野葦平文学碑を経て山頂に戻り、八幡皿倉山の右に城跡花尾山が望まれる。

高塔山は北九州の古い時代からの変遷を見て来た。今後とも北九州市の移り変りを静かに見守ることであろう。

葦平忌は冬に珍らしい暖い日射しの中に、多数参会者の菊の献花、「麦と兵隊」の斉唱をもって終了、参列の本会若松支部役員一同打揃って下山し、本誌の編集会議に切替えて一席を持った。

（藤田　敏夫）

づきける故、朝夕二日三日の間其貝を菜となして悉く食へけるに、漸く病ひ復せしより身体元より健やかになり、其後は終に病と云ふ事を知らず、幾春秋を重ねて老衰の形もなく所謂不老不死の薬にてもや侍りけん。今思ひ廻らすに、早や六百余年と申す昔語りにて我ながらいと不審き身の上に侍る也。然れども人の命限りあるものなれば、夫となりける者も世を去り、子供をも失ひ孫も皆死し曽孫、曽祖孫皆々寿命を保ちて亡くなりぬれども、只吾一人つれなくも数多度の憂ひなきにも面影等も替り衰へもせで長らへぬるを、吾ながらといとうとましく海川へ身を沈めてもと思立し事も度々なりしが、或時は人々にささへられ、又或時は如何なれは斯くは侍るらん唐の仙人とやらんこそ吾の如く長生もする由なれば、よしや長らふる迄生きて見ばやとも思ひ返す事も侍りつつ、世を過るままに我が住む里のわたりなる洞の海も偶々干潟となり、神功皇后の御船を繋ぎ給ひたりし所も何時か程よりは畠となり鰯見山、海士瀬、岩瀬など云へる所も皆名のみ残りて昔の形も見へす侍りしが、今は猶更飛鳥川の渕瀬と替りし海山川里の気色思ひやられ侍るなれば、其間には乱し世も有り、治まれる時も侍りて色々様々の事共侍りしかど、女の身の上なればよくも覚えけるに、所の人も出で来りて、旅人は何国の人にやとありければ、筑紫の片ほとりの者にて候ふ。此御社は如何なる御神にて渡らせ給にやと尋しに、是こそかの六代の御代に仕へ給ひし三百余歳を保ち給へりし武内の大臣にておわしますなり。御身も若き人なれば寿を祈り給へと聞へけるに、我が身の上の話など候しがと去気なくもてなしけれ目出度き御神の御寿にあやかり申度こそなど申しで何くれ

不老長寿の法螺貝祭

物語侍りけるに、若女性の一人何当ども候ず只諸国の尊き宮、寺など拝み廻り候也と答へければ、急ぎの道ならずば暫く我元へ止め申すべしと有しにまかせ伴ひ行しに、家冨み栄えィヤシからざる農家にて候き。此人ヤモメなりければ所の人々に進められて妹背の語ひをなす事年久しかりしに、夫には歳に随ひ老たれども吾は更に面影変りもせず侍りしかば、人々あやしみ化粧の者にやあらん又は切支丹など云へる者にもや侍らんなどひそめき渡るをほの聞き侍りけるより、爰にも止り難く秘かにすべり出て都の方より東の国国を遍廻り、サイ川辺りより此陸奥の津軽の郡に参りしが又もや人々の割なく申給へるに堅くいなみ難くて、此家の主人に嫁し侍る也。自ら筑紫に侍りし時にては今の綿と云ふものなかりし処、麻を紡ぎ布を織る事千反余りなりし。故郷を出でし頃彼の螺貝の殻を我命の親なればとて所の神職なる人を頼みて小さき祠の有しに祝ひ納めて我姿とも形見とも見よかしと申残し候ひしが、今は限りもなき歳月に候へば何如成行侍りしやらん。然はあれど其祠の渡りに船留めの松とて大なる一本有りし也。松は千年のものなれば今に朽木ともならで侍らんも計り難し、もしか此処に至り給ひなばこれを目印に若しも我子孫なる者など侍らば尋出し此物語をも聞せ給はり候へとて、夜もすがら語り明しける由、此商人今年の神無月（旧十月）庄の浦に尋ね来りて伝次郎と云へる者の家に彼の挍尾貝の伝はれるを見、又祠の側に彼の松の有るを見ていとど奇異の思をなし然々の由を伝次郎に物語りたるとなり。

一説に船留の松と云ふは、昔此松に船を繋しと云樹下に木船（貴船）の社有り。是が彼の貝を納めたりしと云ふ祠なるべし。古記に曰く、神功皇后三韓御征伐の時洞の海を乗せ給ふ時、御船坐りて進む事を得ず。此時御船を留め給ひて神は井耳命の遠孫多氏をして船の神を祭らせ、御躬松を植させられて後の印とし給ふと云へり。其苗裔多の武諸木の末多武乙〇の子多の諸乙磨と云人、天喜の頃此処に住ける由今に多氏屋鋪と云有。諸乙磨の住し処なれば、今乙丸村と云ふなるべし、是庄の浦の本村也。又此家昔より流行病に染事なしと云ふ。適々病有時は彼の法螺貝に水を入れて飲時は忽ち快しとかや。近村に流行病ある時は此の貝を吹て疫神を祓ひしか、何日の頃より此事を止めしと云しが、元文の頃より又前の如くしたり。古老の説に此処を寿命谷と申しける由此女の長寿せし故なるべし。又外に長寿の者も多かりしならん。

天明二年十二月

毎日斉　岡部守古書ス

文化財保護に
藤木少年少女
消防クラブ活躍

文化財防火月間の若松地区防火演習は、若松消防署主催のもとに一月二十二日藤木白山神社において開催された。

午後二時発火、機を失せず消防署、消防団は消火態制に入った。これに呼応して藤木少年少女消防クラブ員約三十名は、燃えさかる白煙をくぐって、長い石段のバケツリレーに続く、簡易動力ポンプ操作も鮮かに訓練の成果を発揮して無事終了した。文化財保護に対する青少年の認識の深さと敏速な行動は、関係者の絶讃を浴びた。

事務局だより

◇お待たせしました。会報四十二号をお届けします。編集は若松支部が担当しました。次号は事務局担当で五月一日発行予定です。
◇会員の自由投稿を歓迎します。
◇新会員勧誘にご協力願います。
◇年度末が迫りました。会員名簿整備の都合もありますので、会費未納の向は至急ご納入願います。

始皇帝陵

敦煌への旅

若松区　古賀豊子

「トンコウ」それは四十余年も前より面白い言葉のひびきと共に天国の様に美しい所として私の脳裡にありました。画家であるいとこが壁画の模写をしたものを見せて教えてくれたものでした（之は余談ですが美校出身のいとこが昭和十四、五年頃に勤務していた美術出版社「審美書院」が「西城画聚成」という復製版画集を出版しようとしてその仕事にたづさわっていたのですが、その本は費用その他の事情で遂に世に出る事もなく幻となってしまったそうです）。しかし現実にその地へ行けようとは夢にだに思ったこともありませんでした。或る古代史のグループよりの誘いで総勢二十三人、その道では半プロの様な方ばかりの中に何も知らない私は一人小さくなってついて行きました。大阪空港を飛び立ち上海を経由して憧れの古都西安へ。ここは今回の旅では付録の様なものですが時間は一番多く四泊五日も滞在しました。昼頃に西安空港につき、そのままバスに乗り替えて慈恩寺に向う。途中道の両側は視野が大変広くさすが大陸、見渡す限りの緑の麦畑の中に一ケ所、目も鮮やかな真黄色のじゅうたんをしきつめた様な菜の花畑はとても印象的でちょっぴり郷愁を誘われました。慈恩寺は大雁塔（三蔵法師が印度から持ち帰り翻訳した一三三五巻の仏典が納めてある）で有名であるが書道をやる者にとってはもっと魅力を感じるのがあの有名な「雁塔聖教序」褚遂良の手になる石碑です。今までは活字で馴じみ深い刻字を目の当りにして気がついた時まわりには誰もおりませんでした。その晩は且てロシヤの資本によって建てられたという物凄く立派な人民大厦に宿泊。翌朝は「ニイ、ハオ」の挨拶もとび出し又車上の人となり秦の始皇帝陵へ、之はまだ発掘されていませんがとても造った山とは思えない大きな墳墓です。高さ八十米、東西四七五米、南北四四〇米、皆さん一寸想像してみて下さい。ここから東へ一粁程行くと陪塚の兵馬俑坑につく、ここの事は七～八年前に日本でもマスコミで大変話題になった所なのではぶきますが唯々びっくりするのは規模の大きい事、何と発見された等身大の兵馬俑が六千もあるというのです。次は華清池、あの楊貴妃が玄宗皇帝と甘い愛の日々を送った所、大理石の浴室などもそのまま残っており空の浴漕に入りちょっぴり皇妃の気分を味わいました。紙面の関係で一つ一つくわしく紹介出来ないのは残念ですが後は、小雁塔、碑林、鼓楼、阿陪仲麻呂の碑等を見学し西安最後の日は渭水を渡って見渡す限りの大平原の中に点在する古墳群の見学、乾陵（高宗の墓）、昭陵、章懐太子墓、仲でも胸をときめかせて待っていた悲劇の皇女永泰公主墓の壁画を見た時は感激で心臓も止まるのではないかと思った程でした。五日目は外人観光客の見学として義務づけられている人民公社も見学、現在の中国をかいま見てバスは動物園へ、パンダとの面会で気分もなごやかに西安空港へ。ここは愈々シルクロードの出発点。煌敦への大きな夢を一杯にふくらませ一段と賑やかに機上の人となりました。

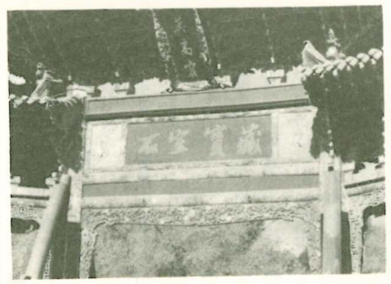
雁塔聖教序碑

楊貴妃の風呂（右筆者）

西北へ向けて二時間の空路は行けども行けども砂漠の上ばかり、左に雪をいただいた祁連山脈を望み乍ら中継地、蘭州につく。ここは一泊するだけで翌朝バスにて出発途中酒泉により「葡萄の美酒夜光杯、飲まんと欲して琵琶馬上に促す、酔うて沙場に臥すも君笑うなかれ、古来征戦幾人か還る」という王翰の悲しい詩で有名になった夜光杯（今は土産物としてよく売れている玉の盃）の工場を見学。バスは嘉峪関へ、ここは万里の長城の最西端のとりで、こんな砂漠の真っただ中にどうしてこんな立派な城を造ることが出来たのかただただびっくり。見学の後、城壁のかげで傘を立てかけ、或は大風呂敷をかぶって砂の中へ用足し、皆と一緒なら恥ずかしくも何ともない。又バスに乗り砂漠行。所々

永泰公主墓壁画

に砂の吹きだまりによって出来た土饅頭、その上にラクダ草がちょろちょろと生えて風になびいている。又砂漠のはるか彼方の地平線に逃げ水が見える、之は蜃気楼なのであるがいかにも湖の水が光っている様に見える。昔ラクダで旅をした人達が水を求めてそこまで行くが行っても行っても水がないので逃げ水という名が付いた由。乗り物にのるとすぐに仮眠をむさぼる私ですがこの時ばかりはさすがに敦煌への期待に胸がさわぎ七時間のバス行ながら一睡も出来ませんでした。やがて緑濃き麦畑が見え出し同時に落日、沈みかけた太陽とバスとの競走、陽が落ちてしまわぬ中に敦煌へ着きたいと一同バスの中を走らんばかりにはしゃいで夕闇につつまれた敦煌の町へ着いたのは八時過ぎでした。こんなさいはての地に、とびっくりする様に立派な敦煌賓館は昨年完成の由。コーフンの余りねつかれぬ一夜を明かし翌朝窓から目にしたものは朝日に映えて陰影濃き砂の山でした。この山の一部に莫高窟があるとのこと。朝食後バスにゆられて三十分いよいよ目的地に到着。ききしにまさる立派な自然博物館に一同ワーと大歓声。砂漠の中に突然そこだけ緑のオアシスがあり川が流れているその向いの砂山の中腹に無数の穴が穿たれている。九大の岡崎先生の紹介状もあったので特別に敦煌研究所長々「段文傑先生」の説明を伺った後いよいよ見学。保存の為人工光線は一切禁止なので朝日の入る午前中だけしか見学出来ないのは本当に残念。写真もダメ。どうしても撮りたい人は一シャッター一万円也とのこと。壁画や仏像の写真などは日本にも専門家の手になるよいものがいくらもあるので一同いさぎよくカメラはバックの中へ（昨年北九州美術館で敦煌壁画展がありましたがその時の方が模写乍らよっ程細かい部分までよく見えました）短い時間乍らこの足であこがれの地をふみしめ、この目で見ることが出来たのはこの上もなく倖せで日本の平和をつくづく有難いことだと感激致しました。



莫高窟門

敦煌といえば壁画、壁画といえば敦煌といわれる様に四百九十二の窟（最盛期には千窟以上もあったらしいがまだ発掘されずに砂の中に眠っているそうです）のすべてが地面から天井まですきまなく絵でおおわれている。一つ一つの窟は以外と狭く二十三人はすし詰めの状態で入る有様。壁画はその時代の生活の様子。天界の想像図又は外国から貢物を持って来た時の絵など実に克明に描かれてありますがあまりにも複雑なものが多く私の様な不勉強者は説明をきいてやっと納得出来る始末、でも待望の飛天も色々と見ることが出来ました。中でも十七窟の樹下美人の図、之は誰でも一度は見たことのある絵ですが本物をまのあたり見た時は思わず涙があふれ出てしまいました。仏像は三千体位安置されている様ですが正直言ってよく分らないのが残念、でも分らない乍らに印度系のもの、西胡人の顔付のもの又は完成された唐代のふくよかな美人顔のもの等どれの前に立っても去り難くいくら見ていてもあき足りぬ思いをし乍ら時間におわれて莫高窟を後にしました。ここで一番びっくりした事は外交政策上か何かしりませんが之だけの世界的に貴重な遺跡を何と大勢の外国の観光客にそのまま見せているという事です。日本では高松塚その他一般の人には全然見せないで封鎖をしております。まだまだ後世にまで遺していくためにどんな手段が構じられているのでしょうか。窟の外の廊下の様な所は美しい繰刻文の磚がしきつめられていました。之も当時の物ときくと靴でふみつけるのが悪い様な気がしてなりませんでした。翌日は莫高窟の穿たれた鳴沙山にいどむ。そんなに高い山ではないが全山砂で覆われた東西二十キロ余り続く山塊、朝日に映えた山容の美しさは私の様な筆下手の者では形容が出来ない。この日は一年に数える程しかないおだやかな天気というがそれでもふもとまでくると砂が口にとび込んでくる。全員用意の身なり（ゴーグルに耳栓、マスクをかけヤッケで頭をすっぽり包み軍手をはめる）を整え登山。一歩登れば半歩ずり落ちる、八十四才のおじいちゃんが先頭を行くので皆負けてはならじとガンバッテガンバッテやっと頂上へ。ついた途端にアッと驚きの声、何と反対側の眼下に三日月形の月牙泉、砂漠の中のオアシスとはまさにこのこと。今度はその岸を目ざして草スキーなみに滑り下りるが砂に埋もれて仲々うまくゆかない。下山して脱いだ靴の中からはコップ一杯程の砂のお土産。かくして敦煌の二夜は終え翌朝は四時起床にてバスで柳園駅へ。帰路はなつかしのSLの旅、台風のため八時間もおくれた列車を待ってやっと乗車。私共は外人専用の軟座車（国内の人の乗る硬座車の七倍の料金）至極よい乗り心地ながら二十四時間変らぬ風景を眺めての砂漠横断は少々うんざり、やっと文字通りに黄色い黄河を眺め乍ら蘭州に辿りつき空路北京へ。ここではお定まりの故宮や万里の長城を見学、最後の晩は美術院の学長先生と色々お話を交し乍らの晩餐会でこの敦煌の旅も幕がおりました。

鳴沙山

月牙泉

高崎氏屋宅備全図考（天保十五年）

若松区　安倍芳一

1図　高崎氏屋敷跡全景（左端の家が高崎宗雄氏宅）

高崎氏は、若松区小石本村の地で、小石村の庄屋役を代々勤めてきた家である。殊に、五代高崎源市、六代高崎喜右衛門、七代高崎正次郎は三代続いて、明和七年（一七七〇）から文政六年（一八二三）まで、大庄屋を務めた。文久二年の時の払川触大庄屋三輪佐一郎の書上帳の高崎氏の初めの項に、

初代目　小石村庄屋　喜右衛門

右は慶長の年中より、居村庄屋役被仰付居候。□□申伝有之、何年に被仰付何年迄相勤たるか相分り不申、前代確と相分り不申にて初代と相唱申候。

右のように、慶長の頃から小石村に居たようであるが、その前は、播州の郷士であって、後に、豊前から筑前小石村に入村したと伝えられてきた。現在、十二代高崎宗雄氏が、小石本村町に居住している。（以前は、河北姓を名乗っていたとも伝えられている。）

高崎氏の旧屋敷は、昭和十三年頃迄は残っていたようであるが、その屋敷跡は現在でも、曽ての宅地の輪郭を知る事ができる。（1図）更に、高崎氏の墓地が、この屋敷跡より約三〇〇メートル東側の通称惣見崎の斜面に、「蒼然と残っている。最近、墓地の整理をした為、一部旧態を損じてはいるが、高崎宗雄氏の墓地は、歴代の庄屋及びその家族の墓石が、なんとか維持されてきた。しかし、傷みはかなり進んでいる。（2図）

筆者は、昭和三十年十月、高崎家を訪れた際に、家族の方が、古文書と家具類を大切に保存されておられたのに感動した事を覚えている。その折、子供の時にかなりの数量の古文書を反故同然に手離していた事を嘆かれていた。しかし、「筑前国御牧郡之内小石村水帳（慶長七年）」、「名寄帳（年代不明）」、「記録抜書」（若松市史第二集掲載）、「土地開作書上帳」、その他馬牧関係文書、金子出入控算用目録、覚書、書状等々、貴重なものが残されていた。それから大庄屋時代の小石、戸畑、江川、本城、払川、二島、修多羅等各地の絵図が破損されず保存されていた。筆者は、昭和三十年に同家を数回訪問して、古文書を略式に分類させていただいた。その後、本格的な調査の計画を約束したが、諸般の要件のため、のびのびになって今日にいたった。

2図　高崎家墓地

幸いに、これらの古文書が、現今まで散逸する事なく高崎宗雄氏宅に保存されてきた事は大変喜ばしい事である。

そこで今回は、高崎氏の宅地図を調査する事により、当時の庄屋の屋宅を紹介してみる事にした。紙数に制限がある為に、全容の紹介ができない事をあらかじめお詫びしておきたい。

高崎氏の宅地図は七枚ある。

㈠撰年不明の指図（3図）

㈡高崎氏地宅看相図　天保十二辛丑閏正月吉日選之　高崎正三郎勝直

㈢高崎氏屋宅備全図（4図）　天保十五甲辰載維夏中澣　久松小庵撰

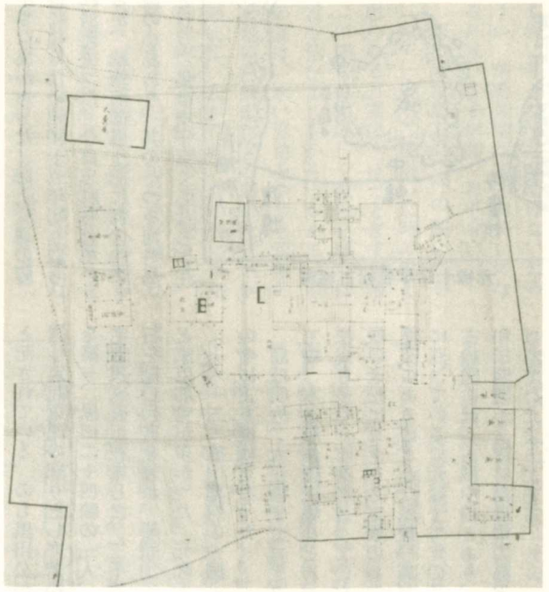
㈣高崎氏住基室安全備方位二十四路局併図　天保十[illegible]辰歳氣暢長日

以上は、縦横一メートル以上の大型の紙に各々の意図する内容が詳細に記載されたものである。他の三枚は、紙質も粗悪で内容も吉凶の位置のみを記したものである。㈡の天保十二年の図は㈢の天保十五年の屋敷構えに改築する為の看相図である。旧来の屋宅に新しく増改築する蔵、浴室、便所、使用人の屋舎等を貼付して、家相を見る為に作成されたのである。

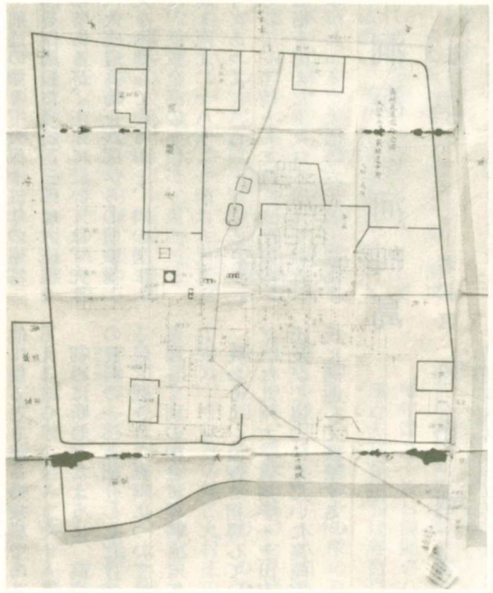
㈠の撰年不明の図は、㈡の図から考察して天保十五年以前の大庄屋時代の屋敷図と見てよい。㈢の図は、屋敷の基本構えを太い線で表し、内部を省略して東西南北二十四路を朱線で表した図である。

そこで、㈠の撰年不明の図と㈢の天保十五年の高崎氏屋宅備全図の二つから当時の高崎氏宅を考察してみる事にした。図が不明瞭であるが、3図の㈠の屋敷構えを、4図の㈢の屋宅図のように増改築したのは、東北の位置にかなり大きい酒醸廩（シュジョウリン）を造り、その並びに杜氏寮が設けられた事から、酒造りによる経済的転換を図ったのではなかろうか。

そこで㈠の図と㈢の図の主家を比べてみると基本的な間取りに変化は無く、便所・待女寮（女中部屋）・押入・床間等を増築している程度である。ただ、土間は間仕切りして臼場を作り、表戸口から



3図　撰年不明の高崎氏宅指図（上が北）



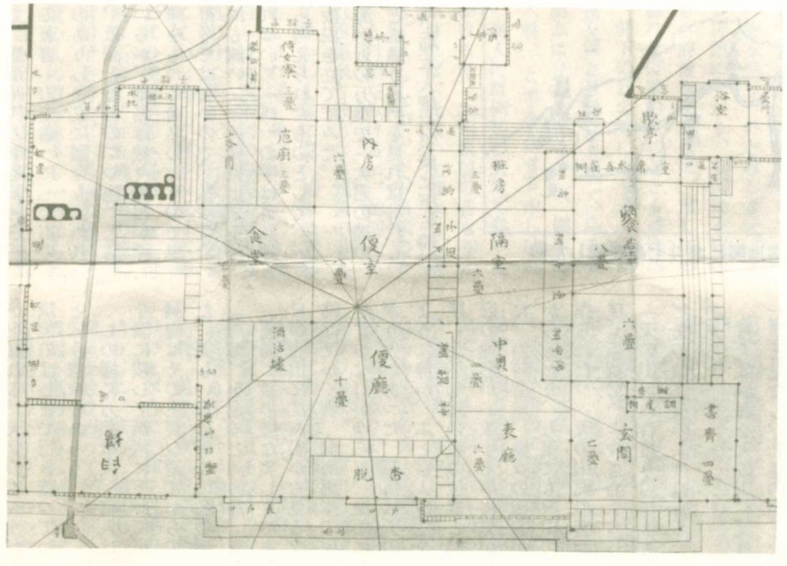
4図　天保十五年高崎氏屋宅図

はいった所に酒沽壚（シュコロ）（酒を売るかまえ）ができ、奥の土間に竈が増えている。これは諸用で訪れる人の増加と仕事内容の変化を配慮した為であろう。

主家を取り巻く建物は変化している。第一に㈠の図の南にある別棟が㈢の図では全部無くなっている。これは庄屋役だけになったので主家で事足りる為に壊したのであろう。又西側の三つの蔵はそのまま残して、傭巧隔屋（ヨウコウカクオク）（工人の離れ屋）・農具庫（シングコ）（農具庫）・牛馬屋・木匠隔屋（モクショウカクオク）（大工の離れ屋）等の建物を東南の地に移している。前述の大きい酒造蔵の新築からみても、酒造り、酒販売を容易にする為に増改築したのであろう。

さて、㈢の図の主家を拡大した5図を見ると南側に三つの出入口がある。右側の入口からはいると、まず玄関の間、その右側に書斎、玄関の間から奥に六畳の間をはさんで、饗堂になる。奥座敷であり、資客の接待の間である。それから、玄関の間から左側が、表廳（ヒョウチョウ）、すなわち役所の仕事をする部屋になっている。その奥に中奥の間、隔室、粧房と続いて浴室、便所に通じる。次に、真中の出入口、沓脱からは便廳になっている。ここは表廳に対しての控えの間であり、一般の役向きの者はこちらから出入りをしたであろう。便廳から奥に便室（休憩所）・内房となって、浴室・便所に通じている。最後に、左端の出入口、表戸口から入ると土間、食堂、庖厨（ホウチュウ）（台所）・落間（ラクマ）（一段下った部屋）・待女寮となっている。

ここで、主家を概観すると、図面だけで考察する為に正確さを欠ぐが、機能的に四つに別けられて、相互に関連を持たせた間取りのようである。東側（5図右側）の玄関から饗堂までは来客用であり、次の表廳から粧房までは役所関係の部屋が主であり、便廳から内房に致る所は控え室及び雑務をする部屋の連なりとすると、西側の土間から食堂、台所等は家人の生活する所である。そして、それぞれの奥の間は壁で仕切っているが、



5図　天保十五年高崎氏屋宅図の主家

表の間は東西に相通じている。

前述の如く、天保十五年の屋宅図を作成した高崎正三郎は大庄屋格であるが、主家に於いては、先代大庄屋高崎正次郎からの屋敷構えを踏襲している事と、四の図には、屋敷全部の面積が、東西三十間・南北二十八間（一間は六尺五寸）あって、八百四十坪の広さからみて、当時としては、大庄屋の風格を備えた堂々たる構えである事がわかる。太田静六氏著「福岡県の民家とその周辺」から見ても他に優るとも劣らぬ規模であると言える。

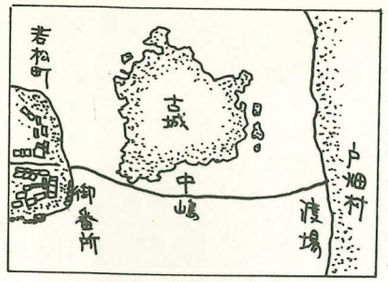
初めに断わったように、高崎氏の資料の一部を紹介しただけであるが、残された資料については、整理して別の機会に報告させていただく。

終わりに、直接ご指導していただいた九州大学建築学・土田充義氏及びご協力いただいた高崎宗雄氏に感謝して擱筆する。

洞海の河斛島

若松区　森川政美

若戸大橋の真下に中の島と云う小さな島があった。海上交通の障害になるため昭和十五年切り取られ消え去った。今は忘れられているが、続筑前国風土記に海の中に両の小島あり。其の一つを河斛島と曰う。島は支子（くちなし）生ひ、海は鮑魚（あわび）を出す。と記されている。のち黒田公が入国し筑前東門の守りとして若松城を築き、黒田二十四騎の一人、三宅若狭家義が在城した。三千六百石を禄し代官を兼ね、船頭加子など家臣郎党が多かった。元和元年（一六一五）徳川幕府の一国一城の令により廃城となった。



元禄十二年若松古絵図

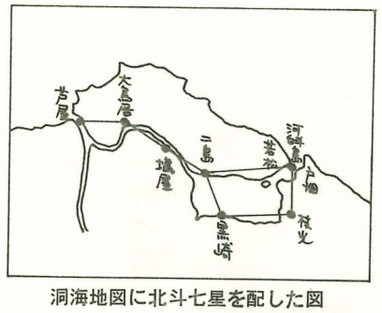
島は明治、大正頃までコークス工場、木造船修理工場などあって住民も多く一町を形造っていた。緑の老松にコークス工場のレンガ煙突があるのどかな風景写真が今に残っている。元禄十二年の若松古絵図には、古城中嶋とあり、元和年間頃から河斛島は中の島と呼ばれていたようである。

私の小学生の頃（大三から昭和の初め）級友の四分の一が船頭の子で、石炭輸送の帆船から登校していた。船の修理などでドックに入る事があるので島から学校に通ふ時もある。或る時その級友に「今何処から来よるんや」と尋ねたら「かば島からや」と答えた。「河馬か―」と云うと、他の友人が「中の島の事よ」と云った。それ以来河斛島は中の島の事で、新旧ふたつの名で呼ばれている事を知った。

最近の郷土史に河斛島を「かごしま」「かわなかじま」「かわとじま」と振仮名が付いたのがあるので不審に思い遠賀郡史を見ると、ふりがが無いので正しくはどう読むのか判らない。あらゆる字典を開いたが（斛）と云う字が発見出来ない。（斛）コクの間違いではないかとお知らせ下さった方もあったが、続筑前国風土記の出典が日本書紀であり、千二百年来伝えられた、れっきとした日本の文字である。又或る古老が現在若松と戸畑をむすぶ巡航船、若戸丸の前身が河斛丸で「かわとまる」と呼ばれていたと教示下さったので「斛」を旁で読み「かわとじま」が正しいのかとも思ったが、気になるので色々郷土史を調べていると、東筑紫大教授玉井政雄先生の「北九州の伝説と史話」に「かばしま」とはっきりふりが付いていたので我が意を得たりと安心した。

さて、江戸時代の学者新居白石はその著書「古史通」に「上古の語言のありしままに猶今も伝われるは、歌詞と地名の二つ也」と誌しているが、地名は我々先祖が深い意味をもって命名したもので単なる符号ではないので、私はこの字典にも無い（今後発見出来るかも知れない）「斛」の字は自然地名から考えられたものとして、一つの仮説を立ててみた。

洞海附近の万葉で「大君の遠の朝廷と蟻通う島門を見れば神代し思はゆ」柿本人麿が筑紫に下る時、海路で作るとあり。天皇の遠くはなれている都、大宰府に行くに、この島々の狭い内海を蟻の通うように続々と船がつづいている。あ々美事なものだ、神武天皇、神功皇后の軍船もこう賑々しく入ったものであろ　か、本当に神代の昔が忍ばれる。天皇の御威光がこの筑紫のはしまで行き渡っている。と云う意味であろう。



洞海地図に北斗七星を配した図

この様に万葉歌人、官人は妻子を国に残して筑紫に下って来た。洞海はその主要な道すがらであった。美しい白砂青松の名護屋の崎（戸畑）を過ると河斛島、資波島（葛島）絵の様な美しさである。日が西山に沈み船から見る夕影の眺は又かく別、洞海両岸の民家にかすかな灯がゆらぎ、漁船にもいざり火があった。洞海は天の川のように静か、ふと官人は空を見上げ、北斗七星の星の位置と洞海附近の地形が一致する事に気が付いた。当時彦星、織女の伝説が中国から伝わり、万葉にも沢山の歌が作られた。「天の川梶の音聞ゆ彦星と棚織女と今宵会ふらし」、「天の川足ぬれ渡り君が手もいまだまかねば夜のふけぬらく」等々である。

官人は洞海を天の川、又は北斗七星と見なし、七星の頭となる星の位置を河斛島とした。この「河斛島」の「斛」の字に深い意味があり「斛」の字を除くと河島、単に大渡川の川の中にある島となる。「斛」の字を先きに旨べた様に字典に無いので旁と偏の語原を調べて見た。偏の白は頭骨、又は栂指の意、旁の斗は北斗七星の意、つまり北斗七星の頭及び栂指に価する星の島であると云う意味で「斛」

と名付けられた。即ち現在字典にも無い字となったのではないだろうか、荒唐無稽な説とお笑いになると思いますが御一考下さい。

次に河斛島と戸畑の狭い処を（巾一一〇米）通過した時の歌と思われる万葉に「ほととぎす飛幡（戸畑）の浦にしく波のしばしば君を見むよしもかも」がある。歌の意は、永い旅路をやっと筑紫の玄関口戸畑にたどり着いた。右が河斛島、左が戸畑、目の前に戸畑側の岸辺を打つ波の音が聞える。時しもほととぎすの鳴声が胸にひびき、都に残した愛する人の事が一層想い出される。任期の終るまで何年か会えない事は判って居ながら、この打ちよせる波のように、しばしば会って見たいものだ、と云う事であろう。

ここを過ぎると洞の入海、海にしては茎のように狭く、川にしては広い、それゆえ別名を大渡川と云う。古今和歌集、土佐日記で名高い紀貫之の歌に「つくしなる大渡川おほかたは我ひとり渡る浮世か」この歌は広く郷土史に記載されているが、訳されているのが少ない。そこで自己流で訳してみた。

筑紫の大渡川は白砂青松、波穏やかで島影の美しい内海、都から単身赴任した官人は唯その眺を観賞し風景を愛でる心の余裕が無かった。歌の中の「おほかた」は二通りの意味があると感ぜられる。その一は「大方」と解　は一部の人を除いた大半の人々。その二は、「大潟」と解せば洞海の四粁以上も続く長い干潟。

つまり、気晴の旅ならいざ知らず、ここを通る大方の人々は官人で、心に残るは国に残した妻や子の事ばかり。同行の友や連れは多いが心の中はひとり旅のごとく寒々と淋しい、身を立て官職に奉づるも渡る浮世はかなしくも世知辛い世の中ではあると云う事になる。

紀貫之は周防国（山口）で歌会を催した記録はあるが、筑前に来た記録がない。若し来て歌ったのか、それ共、友人の話を聞いて作ったのか、彼自身土佐守として四年土佐に赴任した辛い憶い出があり、友人の身になり同情して作ったのかも知れない。八幡区、木島甚久先生の説によれば歌の「ひとり」とは到津駅と夜久駅との中間に位する「独見駅」（ひとりみうまや）帆柱山中腹の縁語ではないかとある。

以上思いつくまま書いたが、あまり飛躍し過ぎてお叱りを受けるかも知れませんが、これも郷土を愛するあまりで御寛容の程を。

筑前国庄の浦寿命貝由来記

（原文のまま）

若松区乙丸の貴船神社の御神体は法螺貝で寿命貝と呼ばれる。毎年四月十五日満開の八重桜の下に法螺貝祭寿命座が催され、遠近多数参拝者は寿命貝からの御神酒を戴き延命長寿を祈る。

若松区　廣田藤雄

抑も天の浮橋の矛の雫の自然凝固るを最初として、大八洲を産み給ふ中に、筑紫の嶋づたひ戸渡る船の舵間より落るしづくの干潟となり、今は岡の県乙丸村庄の浦伝次郎と云ふ者の家に捻尾貝あり。其可否往て知るべし、大小形を見て量べし。往古より叢祠に在て○家（カフカ）祈り祭ること久し。近き頃は人の損ひ破り盗み亡失せん事を恐れて、家に隠し納めて之れに換るに余の外の貝を以て祠堂に捧け祭祀する事今に絶へず。此頃芦屋の人にて、伊万里の瀬戸物を船（残の嶋いなり丸乗組也）に積みて諸国を回りて商売をなす事あり。然るに今年（天明二年）の五月奥州津軽に至り、船宿に逗留し、乗組の者銘々日々に歩み（行商）荷を担ぎ市中在々を売りヒサギける に、其間何某とかや云へる者、或日山路に踏み迷ひ其処彼処となくさまよひけるに、谷川水に野菜の屑流れ来を見て措は此水上に人里有よと力　て川に添って尋行けるに、数十町を経て女房の洗濯し居りたるに逢ひ、我は旅の者にて候が道に踏迷ひて東西をわかず漸く是までたどり参り候。何方へ行けば里に出んや教へ給はり候へ。と申しければ女房答へけるは、此処は深山がくれにて商人などの参りかよふ所にも侍らはず如何して踏みあやまり給ふにや。之れより里まで出給んには道の程にて日も暮れ侍るべし、いとはしさよ。と申す言葉にすがり、如何にも昼の内さへ前後を忘れ候に、増して日も暮れなば狼のゑじきとも成ぬべし。軒下の此の端になりとも今宵一夜を明させ給はらば、一命を助け給ふにひとしかるべし、偏へに頼入候。と手を合せて申しければ、商人には何処の人にて候やと問ひけるに、九州筑前の者なりと答へければ、此女いと驚きたる様にて、あらなつかしの筑紫の人や、と打泪ぐみけるに、如何なれば五百里余り彼方なる筑紫の者と聞てゆかしく様に見へ給ふは不審と申しければ、鼻打かみて、されば自らは元筑前岡の県庄の浦と云ふ処の者に候が、（此女遠賀郡芦屋にて十七歳にて博多へ縁付不縁にて其の後鞍手郡八尋村へ縁に付其処も不縁にて廿五歳で庄の浦に縁付男子を持也）不思議の縁にて本国の人に廻り逢ふも一方ならぬ縁しなれば、今夜は見辛しとも草の莚に休せ給へ、夜もすがら眠物語り申侍るべしイサさせ給へ、と盥を抱へ先に立て案内し我家へ伴ひけるに、左のみ住わびたる体にも非らず。主人は他行にて男女二三人も有て認など取賄ひていかに草臥給らん、いざ休ひ給へ、我里の親兄弟にも逢し心にも候へば夜もすがら御物語申侍るべし。いとあやしくもお思召べけれど、御国への土産とも思ひ給ふべし、とて打火揚げ枕差寄せて語りけるは、抑も自らは山鹿の附近庄の浦（山鹿より十六丁程）と云へる処の貧しき海士の子にて候ひし。其頃庄の浦は山鹿刑部の丞と申殿の領地なりしに、寿永とかや申す年の頃、安徳天皇と申奉りし帝都を落させ給ひ西海に漂泊ましまし、刑部殿を頼り給ひて山鹿の東なる山奥に（今も大君と云ふ処あり）仮の皇居を構へおわしませし時は、自らも生活の海士の手慣し業なれば、磯物取りて御所にも折々捧げ侍りしなり。一年自ら病ひに臥しけるに日に添ひ夜にまし食事も減し衰弱へしかど、片田舎の事にて薬を服する手立もなくひた弱りに弱り行きて、今は幾日生るかと云ふ時、男の子女の童二人持侍りしがいと孝心にて枕に付添ひなげき侍りしに、或る日磯に出て一つの螺貝を拾ひ帰りて是を能く料理し煮調へ進め侍りしが、其味殊の外宜敷覚えしより少しづつ食事にも